

A portrait of Yusuke Nakamura, a man with dark hair and bangs, wearing a black t-shirt. He is looking slightly to the right and has his hands raised in a gesture, palms facing forward. The background is a plain, light-colored wall.

Yusuke Nakamura

巻頭インタビュー1

一枚の作品に 込めるもの

イラストレーター 中村佑介

今号の巻頭は、高等学校の新しい教科書『高校生の音楽1』『MOUSA1』の表紙のために、作品を制作してくださったお2人のインタビュー記事です。まず最初は、イラストレーターの中村佑介さんです。中村さんは数多くの書籍カバーやCDジャケットも手掛けられており、それらを目にしたことのある方も多いと思います。『高校生の音楽』では平成25年度から中村さんの作品を表紙に使用しており、今回の作品も新しい教科書のために描き下ろされたものです。毎回、その教科書を読んでから制作に取り掛かるという中村さんに、ご自身の経験を振り返りながら、美術についてのお考えや、制作において大切にしていることなどを語っていただきました。

聞き手 ヴァン編集部

絵を仕事にするために

Vent(以下、V): 改訂される教科書の表紙にご協力いただき、ありがとうございました。中村さんは、お父様が建築家、お母様がファッションデザイナーという、幼い頃から美術と近い環境で育ってこられました。どのような子ども時代を過ごされたのでしょうか？

中村: 小学生の頃は漫画家、中学生と高校生の頃はゲームのキャラクターデザイナーになりたかったんです。僕は宝塚市出身で、今は大阪に住んでいますが、関西はゲームを作っているメーカーが集まっています。大阪にはカプコン、京都には任天堂、そして神戸にはコナミと。僕はゲームが好きだったので、会社に入ってオリジナルのキャラクターを作るのが夢でした。ゲームもできてお金ももらえるなんて、どんな世界やねんって(笑)。そこで両親から、キャラクターデザイナーになるために

必要な勉強を教わり、その進路として美術大学へ行くことを決めました。

V: 美術大学に入学していかがでしたか？

中村: 高校生までは、クラスの中で自分よりも絵がうまい人と出会ったことはありませんでした。ところが美術大学に入ると、クラスメイトのほとんどが自分よりもうまいわけです。しかし、そうしたクラスメイトや大学の先生も、プロのイラストレーターではない。大学3年生になって「じゃあ誰を抜かなきゃいけないのだろう」と考えていた頃、書店で売られていた本を目にして「この表紙を描いている人を超えないと、イラストの仕事は取れないんだ」と思ったことがありました。当時、大学での成績はよかったのですが、成績はあくまでも大学の中で的一面であって、社会的なポジションではありませんから。

V: 学生時代から、明確に将来の仕事のことを考えていたのですね。

中村: 早くプロデビューしたいという希望がありました。ですが、ほとんどのイラストレーターは会社やデザイン事務所などに所属して、背景を描いたりデザインをつくったりしながら、10年たった頃にキャラクターデザインを担当させてもらいます。そしてキャラクターに人気が出てきて、デザイナー自身がブランドとなってからフリーになるという流れが一般的でした。けれど、僕は早く絵を仕事にした生活をしていきたくかったし、自分の性格から就職というイメージは湧きませんでした。

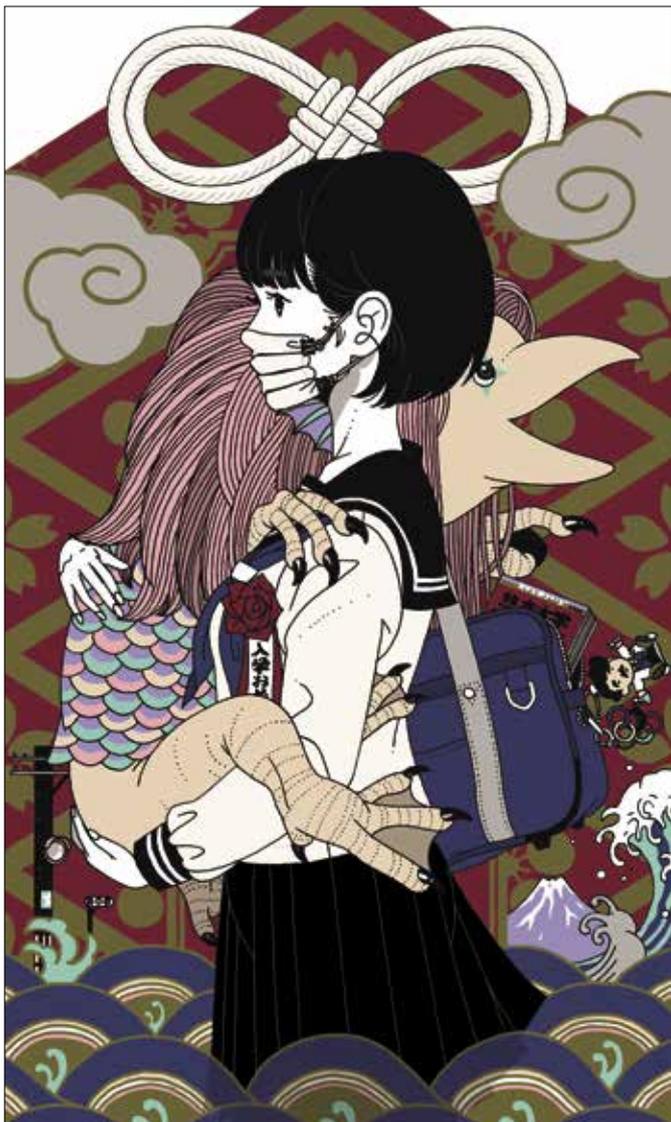
V: そこからどのようにご自身の道を切り開いてこられたのでしょうか？

中村: 社会の中で絵のよしあしを判断するのは、絵を描かない一般の人々です。その人たちがよいと思う絵を描くことが仕事につながると考えました。それからは、展覧会に出品した際には一般の方に意見を聞いたり、身近で絵に関心のない年齢層の高い人に絵を見せたりしました。そこで「上手だね」という言葉が返ってきた絵は失敗です。上手なだけの絵では仕事につながりません。「いいね、かわいいね」「どこに売っているの?」という言葉がもらえたら成功です。そこを目指しながら、大学卒業後2年間ぐらいは自分で営業しながら勉強も続け、絵の仕事を増やしていきました。

大切なのは基礎・基本

V: 中村さんの絵は、一目で中村さんの作品だと分かります。今の作風に至るまでに、どのような過程があったのでしょうか？

中村: もともと、女の子をうまく描けないと思っていました。髪を長くしてスカートをはかせるなど、型どおりに描くのは簡単です。でもそうではなくて、髪は短くズボンをはいていて、しっかりした体型の人物画でも、それが女性だと認識されなけ



中村佑介『アマビエ』(2020年3月)



仕事の基本は、当たり前感覚、
そして礼儀や技術です。
そのうえでようやく、
その人らしさというものが求められます。

れば、女性を描けるようになったとは言えません。女性特有の雰囲気やしぐさ、表情などの内面を描かないと。作家として、どうすればそれらの特徴を描けるようになるのが挑戦でした。

V:それが始まりだったんですね。背景にも引き込まれるような魅力があります。

中村:最初の頃、背景や小物、構図などは、人物を描くための小道具に過ぎませんでした。しかし、それらをよいと言ってくださる方がいらっしゃったので「そうなのかな」と思い、注意して描くようになりました。僕の場合、見ている方からの意見を聞いて、その部分を伸ばしていくようにしています。

V:作品を描くときに、大切にしているポイントは何ですか？

中村:僕の場合まず見ているものを忠実に描いて、その組み合わせ方によって人を魅せるという手法を取っています。同じものでも1mずらすとちょうどいいのに、わざと30cmにして不思議なおもしろさを出すといった方法です。それから、みんなが青だと認識しているものを少し緑がかった青にしてみると、違った世界が見えてくる。また、例えば人物の肌を真っ白く塗ることで「この人の肌はどんな色なのだろう？」と、見る側はそれぞれが考えます。そういう余地みたいなものを、絵の中に残しています。

V:ご自身の表現力や個性などを意識したのはいつ頃ですか？

中村:大学卒業後、3年ぐらいたってからでしょうか。まず身

に付けるべきなのは、クライアントが望むイメージを、イラスト一枚で具現化するという技術です。表現力や個性ではありません。それはもっと先のことです。例えば、音楽の教科書の表紙なのに、もし音楽で用いるものが1つも入っていないイラストを描いたら、教育芸術社さんには「もう来年からは頼まないよ」と思われてしまうことでしょう(笑)。仕事の基本は、当たり前感覚、そして礼儀や技術です。そのうえでようやく、その人らしさというものが求められます。

V:基本を大切にされているんですね。

中村:基礎・基本は絶対に必要です。絵における基礎はデッサンなどですが、そこを学ぶことでさまざまな仕事に対応できます。イラストレーターは、クライアントの商品を「おもしろい本ですよ」「よい音楽ですよ」というように、それを見た人がさらに他の人に伝えたい形にしていくことが仕事です。僕自身、これからも伝播力を理解することが重要だと思っています。

V:中村さんはクライアント側の立場や意図を大切に考えていらっしゃいますが、その意識はいつ頃からですか？

中村:育った環境が影響していると思います。両親が行っていた「依頼があってもものを作る」という仕事現場しか僕は見ていません。「すばらしいものを作ればプロになれる」という絵空事みたいな言葉は、昔から信用していませんでした。

V:現実的に考えていらしたんですね。



中村さんは制作活動だけでなく、美術を学ぶ若手への講演会も多く行っている

○ 中村佑介(なかむら・ゆうすけ)

1978年生まれ。兵庫県宝塚市出身。大阪芸術大学デザイン学科卒業。ASIAN KUNG-FU GENERATION、さだまさしのCDジャケットをはじめ、『謎解きはディナーのあとで』、『夜は短し歩けよ乙女』、音楽の教科書など数多くの書籍カバーを手掛けるイラストレーター。ほかにもアニメ『四畳半神話大系』や『果汁グミ』TVCMのキャラクターデザイン、セイルズとしてのバンド活動、テレビやラジオ出演、エッセイ執筆など表現は多岐にわたる。初作品集『Blue』は、画集では異例の9.5万部を記録中。

中村:一方で小学生の頃「いつも捨てている牛乳瓶のキャップを、みんなが欲しくなるようにするにはどうすればよいのだろう?」と考えて、当時はやっていた人気のキャラクターを描いたことがありました。すると、みんなが欲しがったので、今度はさらに色をきれいに塗ったり、キャップに穴を開けないでと伝えたり……。すると隣のクラスからも欲しがらる子がやってきて、それがうれしかったのを覚えています。学校の卒業文集に表紙やみんなの似顔絵を描いてほしいと先生から頼まれたこともありました。誰かから何かを頼まれて、それをよりよい形にしていくことが僕の喜びでした。

全ての教科が役に立つ

V:今回も教科書の表紙を手掛けていただきましたが、どのように取り組んでくださったのでしょうか? 制作前にはまた内容も読み込んでくださったそうですね。

中村:僕は仕事を依頼してくださった会社の、失敗できない立場にいる社長の気持ちになることから始めます。「次の教科書ですべったら、自分のせいで教育芸術社さんがつぶれるぞ」みたいに(笑)。「先生が気に入る表紙」「生徒が気に入る表紙」「教育芸術社さんが胸を張れる表紙」。それぞれ3つの案件を満たす三角形の中心点を見つけるために、最近の高校生や先生方の意見を聞いたり、ツイッターなどのSNSで情報を集めたりして勉強しました。

V:頭の下がる思いです。今回の新しい教科書の中で、中村さんが気になった音楽はありますか?

中村:おもしろいと思ったのは、水を太鼓のように演奏する「リクインディ」です。今回は教科書のQRコードからその音

楽まで聴けて、かなりマニアック度が上がっていますね。僕はジャズ、ソウル、R&Bなどリズム感のある音楽が好きなんです。音符があろうとなかろうと、リズムに乗って気分が高揚するのは音楽のもつ力だと思います。

V:教科書を手に取った生徒には、どのようなことを感じてほしいですか?

中村:1年間の授業が終わって、生徒が教科書の表紙を見返したときに、「この表紙ってこういう意味だったんだ」「教科書って私たちのことを考えてくれているんだな」と、少しでも何かに気付いてもらえたらうれしいですね。そして「なんだか音楽の教科書って捨てられないな」と感じてもらえたときに、僕は役割を果たせたと言えます。

V:ありがとうございます。最後に、若い人に伝えたいことはありますか?

中村:学校で勉強した教科の全てが、将来の役に立つということです。大人になってからどのような職業に就いたとしても、フリーであっても会社に所属していても、それまでに身に付けたさまざまな知識は本人の可能性を広げます。例えば僕のイラストの仕事は、その商品の物語を1枚にまとめることです。これは、国語の授業が役に立ちました。「この文章を要約しなさい」という課題で考えたことが、現在に生かされています。広い知識は多くの人々に関わる時に非常に役立ちます。そして実は学校で学べることは、あまりインターネットには載っていない。音楽の教科書の表紙を描くにあたって、教科書に掲載されていた外国の音楽について調べてみても、その国の言語でないと情報が出てこない。どの教科でも、簡単には知ることができない専門的な内容を、学校と教科書で学べます。若い方々には、ぜひ何でも楽しんで学んでほしいと思います。



平成25年度『高校生の音楽 1』



平成26年度『高校生の音楽 2』



平成29年度『高校生の音楽 1』



平成30年度『高校生の音楽 2』